
だってしょうがないじゃないですか

宮本司

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

だつてしょうがないじゃないですか

【Nコード】

N3597D

【作者名】

宮本司

【あらすじ】

前科者の元トラック運転手の口癖は「だつてしょうがないじゃないですか」だ。彼の口から自らの犯した罪とその「しょうがない理由」が語られていく。彼の罪とはそしてその理由とは。そして彼は衝撃の結末に辿り着く。

(前書き)

(注) 一部に暴力的表現を含みます

私は前科者です。

確かに刑法にふれることをして警察に捕まりました。刑務所にも入りました。

でもどれも自分で進んで罪を犯したわけではありません。しょうがなかったのです。それだけは信じてください。

初めて刑務所に入ったのは交通事故を起こした時でした。トラック運転手だった私はいつものようにトラックを走らせていました。そこに突然人が飛び出してきたのです。私は精一杯ブレーキを踏みました。間に合いませんでした。

人とぶつかる衝撃を感じた後、私のトラックの前輪と後輪が順序良くその倒れた人を乗り越えていきました。

私は轢かれた人がトラックの後輪に引きづられることにも気づかずにアクセルを踏み続けました。

だってしょうがないじゃないですか。

初めて人を轢いたら、恐怖で逃げだしてしまうのが本能というものです。

走るトラックから飲みかけのビールの缶を投げ捨てました。

運転しながら酒を飲むことは違法だと知っていました。

だからビールの缶を捨てました。

だってしょうがないじゃないですか。

長距離トラック運転手の楽しみといえばラジオと酒くらいしかないのですから。

私はその事故から数時間もしないうちに警察に捕まり交通刑務所に入りました。

事故のもう一方の当事者である高校生の少年は一命は取り留めたものの右手を切断し下半身は不随になるという障害を一生背負っていくことになりました。

その少年のことはかわいそうだとは思いますが、それは事故だったのですからしょうがないじゃないですか。

私も刑務所で反省の日々を送ることになったのですから同じように辛い思いはしているのです。

事故とは当事者の双方ともに不幸な出来事なのです。私はそんな思いを胸に交通刑務所を仮出所しました。

私は仮出所後、職を求めて街を彷徨っていました。

運転免許は取り消し処分を受けていたので運転手に戻ることはできません。

どんな仕事でもいいとあちこちと面接を受けようとしたが、どれも前科持ちとの理由だけで門前払いを食らいました。

交通事故で不運にも刑務所に入っていただけなのに。

世間とは非情なものです。

そんな私に追い討ちをかけるように裁判所から督促状が送られてきました。

それは交通事故の賠償金を支払えという内容でした。

その総額は一億五千万円という途方もない金額でした。

相手が高校生と若かったことそして回復不可能な後遺症を負ったことからそんな金額になったというのです。

あとになって知ったことですが、その高校生が死んでいれば治療費などがかからないので賠償金は半分程度で済むというのです。

もし彼が死んでいれば賠償金の額も低くなり、彼も一生障害を背負って生きるという苦痛を味わうこともなかったのです。

彼が死んだ方が二人とも幸せになれたのではないのでしょうか。

そんな不幸続きの私にも神様は幸福のチャンスを与えてくれました。

なんと私の目の前に茶封筒に入ったお金が落ちていたのです。その中には三百万円もの大金が入っていたのです。

誰かが落としたものなのでしょう。

落とし物は警察に届けなければいけないことは知っていました。しかしこれは神様から私への贈り物だと思っことにしました。

だってしょうがないじゃないですか。

今の私は無職の上に多額の賠償金を背負っているのです。

それに一度に三百万も持ち歩く人ならばお金持ちに決まっています。私がおもったとしてもたいして困らないでしょう。

しかしいくら三百万と言っても私が背負っている賠償金に比べれば小銭にすぎません。

そこで私はいままで自分の苦労をねぎらうために高級旅館に泊まって贅沢三昧の日々を過ごすことにしました。

しかし高級旅館での贅沢三昧の日々も長くは続きませんでした。身なりに不相応な贅沢を続ける私を不信に思った旅館の主人が警察に通報したのです。

私は「神様からもらったお金」と言いましたが警察は全く聞き入れてくれません。

代わりにこんな話をしました。

「あの三百万はな。零細企業の社長が駆けずり回って集めた金なんだよ。」

あの金を落としたせいで不渡り出して倒産したんだ。

お前が拾ってからすぐ警察に届ければ倒産は免れただろうによ。」

だから何だというのでしょうか。

そんなに大事なお金を落とした社長が間抜けだとも言いたいのでしょうか。そんな間の抜けた人間が社長をやっている会社が倒産す

るのはしょうがないことじゃないですか。

しかし私のしたことは「占有離脱物等横領罪」という長つたらしい名前の罪になるそうで、仮出所期間中だったこともあり再び刑務所に入ることになりました。

二度目に入った刑務所は一般刑務所でした。

私が以前居た交通刑務所とは違い、窃盗や傷害など悪いことをした人間がうようよといるところでした。

六人部屋の合同房に入れられた私はその部屋にすでに入っていた悪人たちから、新入りという理由だけで隙間風が吹く隅で寝るように言われました。

それだけではありません。下着を隠されたり、食事を取られたり、私は何も悪いことをしていないのに毎日こんな屈辱を受け続けました。

そして遂にあの日その出来事が起こったのです。運動の時間にバレーボールと称して同質の悪人達が私にボールをぶつけてきました。へらへらと笑いながら私を蔑むようにボールをぶつけてきます。

そして何度目かのボールが私の顔を直撃しました。

鼻から出た血が口の中に入り口の中が血の味で一杯になりました。私の頭の中まで真っ赤に染まるような高揚感が湧いてきました。

私はボールをぶつけてきた男を思いつきり殴ると、外の世界に面した塀に向かって一生懸命に走りました。

塀をよじ登る私を止めようとする刑務官を蹴りながら一心不乱に塀を登りました。

だってしょうがないじゃないですか。

こんな危険な場所にこれ以上はいられません。

私は本当はこの塀の外の人間なのです。

しかしあと一息のところまで私の手は塀の上に張り巡らされた有刺鉄線に刺さりました。

私があまりの痛みに一瞬動きが止まったとき駆けつけた刑務官に塀

から引きずり下ろされました。

刑務所の外の空気を感じられたのはほんの一瞬だけでした。刑務官に引きずり下ろされ再び刑務所の土の上に仰向けに転がりました。

私は押さえつけようとする刑務官たちに必死に抵抗しました。まるで子供がグズるように両手両足をばたつかせました。

その内の何発かが刑務官に当たりましたが、刑務官たちは慌てる様子もなく、まるで赤子の手をひねるように私を押さえつけました。

私はその日から刑務所生活を独房で過ごすことになりました。独房はいじめられることもなく静かでした。しかし数日でその静かさに飽きてしまいました。

だっしょうがないじゃないですか。人間は刺激を求める生き物なのですから。

私はその空虚な時間をあの脱獄の日のことを思い出すことで埋めようと思いました。

口の中に広がる血の味。

血に染まった手が放つ独特の臭い。

自分の手足が人の肉体をなぶる感触。

ほんの暇つぶしにしかすぎませんでした。他にすることのない私にとっては唯一の刺激だったのです。

私はようやく今日刑務所から出所しました。

そしてあなたに出会ったのです。

私は出会ったばかりのあなたの顔を殴りつけると物影に引きずりこみました。

だっしょうがないじゃないですか。

誰かを殴り殺したいと思っている私の前にあなたが現れたのですから。

独房の中で膨らんでいった空想を実現しようと思っていたときにあ

あなたが現れたのですから。

だから殺されてください。

できれば甘美な悲鳴も聞かせて下さい。

それがあなたの人生で最後のしょうがないことですから。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3597d/>

だってしょうがないじゃないですか

2010年12月17日02時48分発行